青島幸男

極楽トンボ（ごくらく）

親父はな、出来もしねえヤクザな夢を
追ってねえで商売でもやれってんだよ
ひでえことを言うじゃねえか

楽トンボ

文藝春秋

©YUKIO AOSHIMA 1982 PRINTED IN JAPAN

極楽トンボ

1982年10月25日 第1刷

著 者 青島幸男

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町 3—23

定 価 800円

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社

極楽トンボ・目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

極楽トンボ　5
鐘の鳴る岬　59
シャレデ壮観号　109
アモスコ　163
あとがき　192

装幀　佐伯俊男

極楽トンボ

1

頭の奥にワーンという騒音が、まだ耳鳴りのように響いている。あたりは正に落花狼藉、呑み残しの様々なグラスと、溢れるほど吸い殻の入った灰皿、空瓶が立っていたり倒れて底を見せていたり、カウンターの上も、客席のテーブルも、散らかり放題に取り散らかされている。湿ったコンクリートの床には、クラッカーの紙筒と、こんがらがった紙テープ、紙の三角帽子に、つまみのグリーンピースやピーナッツが散乱していて足の踏み場もない。カウンターの奥に立った小さなクリスマスツリーの消し忘れた豆電球が、チカチカと点滅するのをボンヤリと見つめながら、ハムはスツールに腰かけて一人でタバコを喫っていた。夕方から今しがたまで、クリスマスソングのLPをとっかえひっかえガンガン鳴らし続けたプレーヤーが、まだ余熱を持っていて、時々チリチリと音を立てる。天井といわず壁といわず、無茶苦茶にはりめぐらされた赤やブルーの銀

紙のモールが、隅に置いてあるガスストーブの熱気でカサカサと小さく鳴っている。
どうしてこう何時も俺は貧乏くじを引くようなはめになるのかと、ハムはいぶかしく思った。
「いいよ、いいよ、今夜はイブだ、片付けるのは明日にして皆でブワーッとどっか行ってもり上ろう」
とこのトリスバーのオーナーである幸二がそう言った時は、ハムもそのつもりでいた。閉店時間の二時を過ぎる頃は、客も気のおけない常連ばかり三人が残り、一緒に遊んでいるのか商売してるのかわからない状態で、バーテンの宮下までが、すっかり出来上っていて「おい西田、お前、俺の注ぐ酒が呑めねえってのか」とふざけて客にからむ始末だった。
「いや、俺やっぱり店に残ってあと片付けしとくよ」
その時ごく自然にハムはそう言ってしまった。とりたてて深い意味や、前々からそう決心していて、どうしてもそう言わなければならないと思っていたわけではない。
「また、どうしてそういうこと言うの、皆でブワーッと行こうって時に、しらけるじゃないよ、いきましょ、いきましょう……。何が気に入らないの」
宮下がかじりついて来た。
「いや別に何が気に入らないってわけじゃないんだけど……」
とハムがぐずぐず言いかけると、
「いいよ、こいつはいつだってそうなんだから、置いてこう、置いてこう、ガキの頃からそうなんだから、放っとけよ、さあ行くぞ」

幸二はそう怒鳴りながら、オーバーをひっかけた肩でドアーを押し、どんどん先に立って出て行った。宮下が最後までしつこく腕をからませていたが、客にうながされて、

「じゃ行った先から電話するからね」

とハムの背中をポンとたたいて泳ぐように四人のあとを追っていった。

箱型の看板を引き入れ、カーテンを閉め、レコードを止めると、さっきまでの騒ぎが嘘のように、店の中はシンと静まりかえって、足もとから寒さが忍び上って来る。ハムは残っていてよかったと思った。連中と一緒に行けば、又したたかに呑んでグズグズになってしまうに違いない。明け方に八重洲口構内にある銭湯へ行って、熱い湯で酒っ気を抜いて、出勤して来る堅気のサラリーマンにまじって電車に乗り、吉祥寺の家へ帰って昼過ぎまで寝ていることになるに決ってる、そうなればまた夕方にはこの店へ出て来て、ズルズルベッタリにバーテンの真似事、きりがつかない、きりがつかないと思いながら、この先また三月(みつき)でも半年でも平気で過ごすことになるだろう。

ハムはタバコを深々と喫い、呑んでいるブランデーグラスの中に喫い殻を投げこむと、

「今日かぎり、もうこの店やめよう」

とはっきり口に出しそう言ってはずみをつけるようにスツールをすべり降り、客席の空瓶を集めはじめた。灰皿やグラスを全部カウンターの上にあげ、下のくぐりを抜け、スノコ板を鳴らして洗い場に立つと、儀式でも取り行いそうな手つきで、丹念にワイシャツの袖(そで)を折り上げ、ゆっくりとグラスを洗いはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四月の初めからクリスマスイブの今日まで毎日この店に通って来て九カ月、長いといえば長い、短いといえば短い九カ月だった。

2

高校一年の時にたまたま席が並んでいたせいでそれ以来仲良く付き合ってきている幸二から新宿のバーへ呼び出されたのは二月の末だった。前の年に不人気の鳩山内閣がつぶれて、代った石橋首相が病気のため退き、岸信介内閣が成立した昭和三十二年、折から神武景気の延長で、盛り場はどこも活気に満ちていた。

「親父がさ、金貸してやるから何か商売しろってんだよな、何かったって別に手に職があるわけじゃなしさ」

逢うといきなり幸二は、待ちかねていたように話しはじめた。

「こういうトリスバーってのさ、俺達毎晩みたいに呑み歩いてるけど、これ水売ってるみたいで、なんかすごく手軽に儲かりそうな気がするんだけど、どうかね」

相変らず気楽なことを言っている。この男、一昨年大学は卒業した筈だが、学校に残って、末は教授をめざすんだと大学院に籍は置いているが、その実は卒業就職の時期に肋膜炎を患って、家でブラブラ療養生活を送っていた。何でも投稿した漫才原稿が縁でラジオライターのような仕

事もしていると聞いたが、どうも今の様子ではそれもパッとしないようだ。
多分に躁鬱症的で、感情の起伏、振幅が大きい。何か一つのことに熱中すると、異常に饒舌になり、何が何でも相手を説得しなきゃ気がすまないという性質で、そのためにハムはいつでも、ついつい幸二のペースに乗せられその挙句はお守り役で、最後にはきまって苦汁をなめさせられている。ハムの方はどっちかというと生真面目で、何でもお座成りには出来ない几帳面な性分、幸二に言わせれば野暮で偏屈で優柔不断、どの道幸二と一緒にいれば、割を喰うのは自分と十分承知はしているのに離れることが出来ない、因果なことだともいつも思っている。
「俺は本当は将来は何かもの書いて生活するようになりたいと思ってるんだけど、親父はな、作家なんてお前には無理だよ、出来もしねえヤクザな夢を追ってねえで商売でもやれってんだよ、ひでえこと言うじゃねえか、そいでおれトリスバーくらいなら出来そうだっていったんだよな」
とそこまで言うと幸二は、もったいをつけるようにグラスに手をのばした。
「親父さん何ていったんだい」
ハムはついつられて先をうながした。
「そう、そういうまともな商売の方がずうっといい、ってそう言いやがんの」
とニタニタしている。息子が息子なら親も親だ、この親子はどうかしてるんじゃないかとハムは思った。
幸二の父親は、根っからの江戸っ子で落語に出て来る人物のような人、善人だが短気で手前勝手、まあよく似た親子で、幸二と瓜二つだ。互に認めあってはいるんだろうが、二人共強情張り

だから喧嘩がたえない、いまだに幸二は拳骨をくらうことがあるという。おやじさんは、都内に旅館を二軒持っていて、それほど商売熱心とは思えないが呑気な身分、普請道楽でしょっ中砥の粉のついた半纏を着て飛び廻ってる。まあ、あのおやじさんなら、作家志望よりバーのマスターの方がずっと健全だと思ったとしても不思議はないと、ハムはあらためて納得した。

「第一さ、自分で酒場やってたら、いつだってただで呑めるしな」

ハムがあきれて黙っていると、ちらっとたしかめる眼つきでのぞき込み、

「なあ、一緒にやってみねえか、手伝ってくれよ」

と笑いかけて来た。これがくせもの、いつもこの手で振り廻されているから、ハムもここが正念場とじっくり腰をすえてこの話をはねつけてやろうと身がまえ、

「馬鹿なこと言っちゃいけないよ、誰でも簡単に出来るようで一番難しいのが、水商売だっていうぜ、二十三や四の若造が無理なことしたって元手をなくすだけだ、やめとけよ」

とにべもない言葉使いで、ぷいと横をむいた。

「だからってお前、四十五十になってから赤いチョッキ着て、カウンターの中へ立ってるのもしまらねえぜ、若いから出来るんじゃねえかなあ、若い女の娘のグループが常連になったりして、毎晩キャーキャーやってたら、面白いだろなあ」

幸二の方は少しもひるむ様子を見せず、隅のテーブルに陣どっている女性グループを目で追っている。

「女？　お前そんな考えで商売しようとするならそりゃ絶対やめた方がいいぞ、悪いことはいわ

ないよ、第一動機が不純だよ」
ハムは何となくひきこまれそうな気がしたのか少し語気を強めた。
「ちょっと待てよ、俺は慈善事業や共同募金をやろうっていってるわけじゃないぞ、たかだかトリスバーをやろうっていってんだよ、不純も不謹慎もあるもんか」
言われてみればもっともな話だ、さらに幸二は続けて、
「本当のこと言えば、体もボチボチ良くなってきてるし、昼間はブラブラして夜になるとこうやって酒ばかり呑んで歩いてるんじゃ仕様がねえからさ、まあバーでもやって見ようと思っただけで、何もお前に出資しろとか言ってるわけじゃなし、手伝ってくれれば、それ相当に給料も出そうと思ってるんだぜ、お前がどうしてもやめろというなら、また別のことを考えてもいいけど」
そう言うとゆっくりタバコに火をつけ、
「お前だってあんまりえらそうなことは言えないだろ、いまだにデパートの婦人服売り場で値札つけやってるんじゃねえのか、そのくらいならトリスバーのマネージャーやったって別に経歴に疵がつくってもんでもねえだろう」
と今度は妙に気に障るようなことをずけずけと言ってきた。ハムは、こっちだって好きでやってるわけじゃないと言いたかったが、何ともならずにもてあましている情ない今日此頃の日常を、すっかり見透かされているようで落着かなかった。ハムは、いつもそうなんだ、いつもこの手でこいつにたぶらかされるんだと、屈辱的な思いをかみしめていた。
そのうちに、七百二十CC入りの一本のウイスキーのボトルから、何杯のシングルがとれる、

ハイボールにすると何杯、金額に直すといくらになるとか、おつまみなんてものはほぼ仕入れの何倍くらいになるとか、幸二はとうとうと説明しはじめた。はじめのうちこそ批判的だったハムも、いつの間にかすっかり乗せられて、一緒に皮算用をはじめるハメになっていた。

「調査、調査ですよ。マーケットリサーチが先ず第一、もう一軒行ってみましょう」

と勝手な理由をつけて、次から次とはしごをして歩き、二人共すっかり酔っぱらってしまった。

ハムはもう完全に幸二のペースに乗せられてしまって、

「いいの考えたぞ、これはどうだ、ええッ」

と店の名前の候補をあげては、胸のポケットからとり出したパーカーの万年筆で、ナプキンにインクがにじむのも気にせず、それらしい名を次々と書きつらねていた。

やがて話はどんどんエスカレートして、二人の店は、渋谷、新宿にも進出して、ついにチェーン店の輪は日本全国にひろがり、店の名を冠した競走馬の馬主になるところまでいった頃には、もう完全にベロベロといってよかった。普通に考えればこの計画は杜撰に過ぎ、このまま行ったら前途多難、というか成功率ゼロ、もう少し冷静に考えなおすべきはずのものだった、とハムは今でも思っている。

それからしばらくは幸二から何の音沙汰もなかったが、三月になると、人形町の交差点近くのちょっと奥まった所に手頃な貸店舗があったのを幸い、早速借りうけて実際に店作りをはじめてしまったのだから驚いた。

前々から幸二は、普請道楽の父親について歩いていたおかげか、木場で材木を買うすべも知っていたし、建築材料屋にも顔がきいた。知りあいの職人も多かったから、手のあいてる人に来てもらうことにすぐに話もきまったようだ。

幸二は変に器用で、図面も引いたし、見取図も書く、てきぱきと職人に差し図して、インテリヤの一切も自分でやった。途中で暇を持てあましてる幸二のおやじさんがやって来て、ああだこうだと注文をつけるので、いらいらした幸二とぶつかり、あわや親子で大立廻りという一幕もあったが、幸二の大ヒステリーに、おやじさんもあきれて、口出しをしなくなった。幸二は大工顔まけの腕だから仕事が面白く、うれしくて仕方がない。毎日毎日、朝六時起きして食事もそこそこに現場へかけつけて来る。ハムもこんなことがきらいな方じゃないから、デパートで女の洋服の正札つけの仕事をおっぽり出して、もっとも、むこうでもハムのことなんかたいして当てにしてるわけじゃない、だらしのない話だが、いつの間にか幸二の助手のようなかたちでいろいろと手伝っている。モルタルを運んだり、防腐剤を塗ったり、木屑を集めたり、たいした事するわけじゃないが、着々と工事が進んで行く毎日が楽しくてたまらなくなってしまっていた。建具の吊り込みや細部のまとめまで、何でもこなす幸二のようにはいかなかったが、下地が出来た上に、波型に機械加工されたはめ板を、ズラーッと並べて打って行くような仕事させてもらうと、このまま永久にこの作業が続けばいいと酔ってしまうような一瞬さえあった。現場で三時に職人たちと一緒に喰うキツネうどんもうまかったが、五時に仕事が終ってから皆で銭湯へ行ったあとのビールの一杯もかかせなくなった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com